

特集

イラン革命と南アジア

—共振の三〇年

山根 聡

今春の大学での授業中、「九・一一」が話題になった。だがここ二、三年、新人生の反応がこれまでと明らかに違ってきている印象があった。筆者にとつて「九・一一」は昨日のような出来事だが、平成生まれの大学生には小学校時代の曖昧な記憶でしかなく、ビン・ラーディンも、こんにちメデアで扱われないため、印象がないのだ。一〇年一昔とはよく言ったものである。

イラン革命とアフガニスタンへのソ連軍侵攻から三〇年が経った。人間で言えばほぼ一代が過ぎたことになる。「九・一一」を実感していない大学生にとつては、イラン革命やソ連軍侵攻は教科書の出来事ではない。二〇年しか年齢が違わないのに、と考えると、その年齢差が、現在の世界が抱える問題にとつて大きな転換となったイラン革命や対ソ連戦争の記憶という点で大きな差を生んでいる。もちろんこのような経験の差は常に感じられてきた。だからこそ、歴史に刻まれる様々な事件について、同時代のさまざまな人間の記録をひとつでも多く残すことは、後世の検証にとつて重要なのである。

イランにおける宗教による革命は、周辺

地域にも多大な影響を及ぼした。筆者は南アジアの文学を研究しているが、パキスタンやアフガニスタンに対するイラン革命の影響は、これらの社会に鮮明に現れている。小文では自身の経験を振り返りながら、イラン革命後のイランと南アジアの関係を中心に述べてみたい。

イラン革命のとき筆者は中学生だったが、当時の記憶が曖昧で、なぜかソ連軍のアフガニスタン侵攻を憶えている。この時期新聞にはアフガニスタンでの政変が掲載されていた。暗殺説の飛び交う指導者の急死が続いた後の軍事侵攻だった。現地の写真が入手困難だったせいも、記事の写真が粗くソ連軍侵攻の文字が掲載されていた。

大学受験を控えた八二年、高校での世界史の授業は担当教師の独断で、一年間インドとイスラームを中心としたものだった。専門書や論文の写しを配布しながらの授業だったが、あるとき加賀谷寛先生が書かれた論文を引きながら、「ガズニ朝」は「ガズナ朝」なのだ、と教わった。「二」を「ナ」だと証明する苦勞を聞かされたあと、「残念ながら対ソ連戦争で今は行けないが、い

つか行つてみたい」という話をされた。その話は筆者が大阪外国語大学のウルドゥー語学科を選択した大きな理由のひとつになった。

大学生になって初めてパキスタンへ旅行に行く、日本のプロレスラーがパキスタンのアフガニスタン難民キャンプを慰問していた。代々続くレスラーの家系に生まれたパキスタン人の腕をへし折り、日本人レスラーの知名度は一気に高まった。また当時、日本のタバコの箱の横には、「この収益はアフガニスタン難民支援に役立てます」という旨の文言が書いてあった。パキスタンのズイアーウル・ハク大統領やアフガニスタンのムジャールヒディーン指導者らが来日し、対アフガニスタン難民支援事業に拍車がかかった。門外不出だったガンダーラ美術の傑作、「断食する仏陀像」も日本で公開されるなど、日本とパキスタンは対ソ連戦争での連携を強化していった。当時、日本とパキスタンの間での査証免除が行われ、多くのパキスタン人が来日したのもこの時期である。大学卒業後、パキスタンへ留学する際、特定の部品や機械の共産圏への流入を禁じるココム（対共産圏輸



出統制委員会」の規制ため、空港でラジカセを細かく調べられたのも印象的だった。

留学先は、ソ連軍撤退直後でジハード勝利に沸くパキスタンだった。級友には対ソ連戦争帰りもいて、月明かりの渓谷でのソ連軍との死闘を自慢げに話す者もあった。映画はアメリカとムスリムの蜜月を描いた『ランボー・怒りのアフガン』など、対ソ連戦争を描いたものが上映されていた。ムスリム側の勝利になると、映画館を揺るがすような喝采が起こり、「アッラーは偉大なり」の声が沸き起こった。バーザールの古着屋は、西側諸国からの難民支援目的の古着が横流しされて大量に出回っていた。当時のパキスタンは、アフガニスタンでの「ムスリムの戦争」の勝利に酔っていた。いや、むしろその酔いから醒めつつある時期であったともいえよう。ジハードを推進し、パキスタンでのイスラーム化を率先することとで西側諸国やアラブ諸国から莫大な支援を受けたズイアール・ハク大統領が一九八八年八月に不慮の飛行機事故で亡くなり、首都近郊での武器格納庫の大規模爆発が発生したりするなど、対ソ連戦争の終焉が対パキスタン支援の終りを告げるのかのような象徴的な事件が相次いでいた。

イラン革命は、アフガニスタンとパキスタンの社会に多大な影響を及ぼした。アフガニスタンでは、イラン革命を受けて、反政府グループであるムジャヒービディーン諸派のなかでも暴力を辞さない強硬派のグル

ブッディーン・ヘクマティヤールが、アフガニスタンにおけるイスラーム革命の実現を目指し、ホメイニー師に対する敬意を表明していた。スンナ派の彼は対ソ連戦争時代、西側諸国やサウジアラビアからの支援を得ており、イランとは反発する立場にあったが、イランのイスラーム革命には一定の理解を示していた。アフガニスタンでは一九五〇年代半ばから、エジプトのアズハル大学に学んだ学生らが、帰国後、母国のソ連への接近に反発し、カール大学等でイスラーム研究会を主催しながら反政府活動を行っていたが、イラン革命によりイスラーム革命の可能性を見出したのである。アズハル出身者にはムスリム救国戦線のムジャディディ党首、アフガニスタン解放イスラーム同盟のサヤーフ党首、イスラーム協会のラッバーニー党首らがあつた。ラッバーニーがエジプトにいた頃、ムスリム同胞団のサイイド・クトゥブが処刑されている。彼らは、クトゥブやパキスタンのマウドゥーディーらのイスラーム復興思想に影響を受けていた。

ムジャヒービディーン諸派は、アフガニスタンの諸民族で構成されていたが、一般には派内の多数を占める民族とのつながりが強調された。シーア派組織の多くはアフガニスタン中部山岳地域を拠点とするハザラ人によって成立していた。それはアフガニスタンのシーア派のほとんどがハザラ人で構成されていたからである。シーア派

の組織は一〇近くに分立したが、そのほとんどがイラン国内で結成されていた。これらは対ソ連戦争期を経てイスラーム統一党とイスラーム運動党二派に分かれた。前者はシーア派系諸派が統一して結成されたマザーリー師率いるシーア派系最大の党で、イランからの支援で急速に台頭した。これに対しシャイフ・アースィフ・モーセニーが率いるイスラーム運動党は、一九八〇年にイラン政府から国外追放命令を受けることとなった。ヘクマティヤールは、ハザラ人（シーア派）の権益確保を約し、統一党との連携を図り、のちの内戦時代、両者は共闘体制を持った。

イランは対ソ連戦争時、アフガニスタンのみならず、パキスタンのシーア派へも支援を行っていた。たとえばシーア派のマドラサ設立には、イランの支援があつた。パキスタン独立時、西パキスタンのマドラサ総数はわずかに四五校だったが、これが一九六〇年代には四六四校に、一九八〇年代に二〇五六校にまで増加したのは、ひとえに対ソ連戦争をジハードとし、国内のみならず海外からも多くの「学生」がマドラサを拠点に集結、ここから戦地へと向かったという背景がある。シーア派のマドラサはパキスタン独立時四七校（西パキスタン側）だったが、二〇〇〇年の統計では登録分だけでも二九七に増えている。その多くは一九八〇年代に設立されたもので、イラン政府が支援していた。だが一九八〇年代後半、パキスタンでのスンナ派とシーア派



の対立が顕在化し、イランによるパキスタンのシーア派への支援を批判する声明がスンナ派強硬派から出され、イラン文化センター（ラーホール）職員の見殺害など痛ましい事件が発生した。

さて筆者は留学を終えてしばらくして、一九九四年から二年余、専門調査員として再びパキスタンに赴いた。ムジャーヒディーン各派関係者との面会やアフガニスタンへの出張を重ねるうちに、戦争に参加したかつての級友たちの証言が、筆者の中で一層現実味を帯びることとなった。

この時期アフガニスタンではヘクマティヤールやドーストム派、ムジャディディ派統一党がラッバーニー政権に反対して首都への集中攻撃を行っていた。彼らは「アフガニスタン・イスラーム革命最高調整評議会」を結成し、政治的、軍事的共闘を前面に打ち出した。この統一組織の名称にあるように「イスラーム革命」の志向は一九九〇年代半ばにも継承されていた。アフガニスタンは内戦状態に陥り、パキスタン、イラン、中央アジア諸国によるアフガニスタン諸派への関与が取りざたされ、「小さな冷戦」と批判された。

イランはアフガニスタンでの自国の影響力を念頭に、当初はシーア派勢力を中心に

影響力を持っていた。だが一九九〇年代の内戦期に入ると、ムジャーヒディーン各派が合従連衡を繰り返すようになり、特にタリーバーン台頭後は、ラッバーニー大統領率いるイスラーム協会に接近した。それは、タリーバーンが一九九五年マザリーリ統一党首を殺害し、一九九七年には北部のマザリーリシャリーフでイラン人外交官ら一名を殺害するなどの事件が発生し、スンナ派の強硬派であるタリーバーンに対抗するラッバーニー派ら北部同盟への支援が重要視されたためである。またラッバーニー派はペルシア語（ダリー語）を母語とするタジク人が居住する北東部を拠点とし、イランと言語文化的にも近いといわれた。

「九・一一」以降、アフガニスタン情勢は新たな局面を迎えた。特にパキスタン側はタリーバーンに同調するグループが「対テロ戦争」に協力する政府を攻撃するようになった。パキスタン国軍はテロ組織掃討作戦の一環として集中的な攻撃を行っているが、これにより一般市民が国内避難民として居住地を離れたり、掃討作戦に巻き込まれて死傷するなど被害が出ている。パキスタンにおけるタリーバーンの再活性化の背景には、部族長が支配してきた連邦直轄部族地域（FATA）に、対ソ連戦争時代に設置されたマドラスに多くの部族地域外のムスリムが流入し、「イスラーム革命」「ジハード」等の思想を持ち込んだことが影響していると考えられる。対ソ連戦争時代

は西側諸国の支援もあって、ムジャーヒディーンが歓迎されていた。部族長らは自身のモスクやマドラスを持ち、部族の慣習法とイスラームの親和性を説いてムジャーヒディーンを客人として歓迎した。だが戦争後は、彼らムジャーヒディーン唱える「イスラーム」と部族の慣習に齟齬が生まれ、部族長よりも若い宗教指導者が台頭するようになったのである。慣習とイスラーム的価値観の相克はいずれの地域にも見られることだが、ここでは武装蜂起が起り、これを国軍が武力で抑えようとしている。

一方イラン国内では、タリーバーンに影響を受けたというグループの存在はほとんど確認されていない。これはやはり、対ソ連戦争時、あるいは戦争後現在に至るまで、どれだけ外国人兵士を受け入れたかの違いが影響しているのではないだろうか。これについては、今後検証する必要がある。

三〇年前の新聞は、アフガニスタンに関する画質の悪い写真が紙面を飾っていた。だが今や世界各地で発生する事件はほぼそのままの映像で、世界に人々が同時に共有するようになった。さらに安価なインターネットの発達により、誰もが世界に発信できる時代を迎え、情報の拡散と共有、思想や行動の共振を急激に促進させている。イランのイスラーム革命の影響は今もなお、南アジアのイスラーム運動の底流にあるのではないだろうか。

(やまね そう／大阪大学准教授)